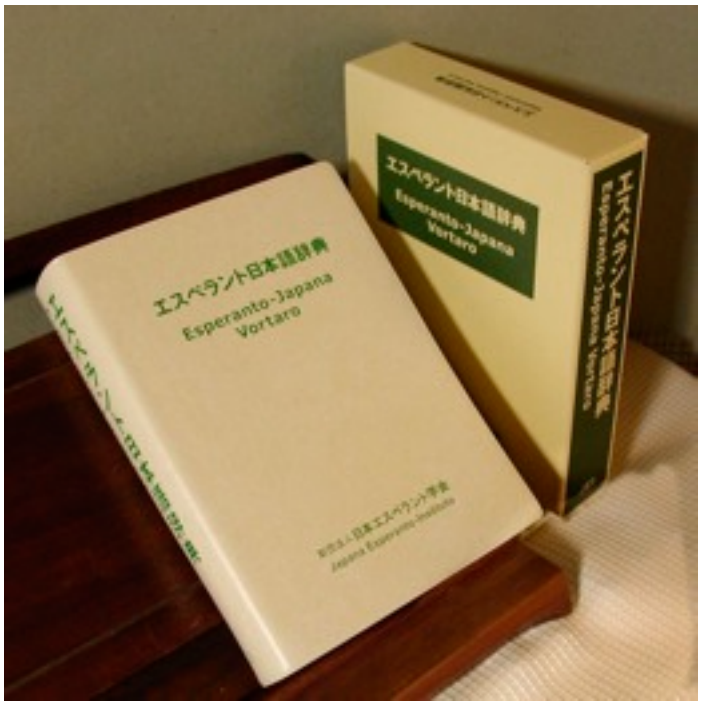
センター通信　第249号

2006年9月30日発行

名古屋エスペラントセンター　Nagoja Esperanto-Centro
461-0004名古屋市東区葵一丁目26-10ユニーブル新栄301号
郵便振替　00840-8-40765［名古屋エスペラントセンター］
http://homepage2.nifty.com/nagoja-esperanto/

エス日辞典を使って

山本　修



JEI発行のエスペラント日本語辞典、年内価格￥5,000.　撮影：山田義

日本人にとって分かりにくい重要な語の用法が詳しく説明されているので、誤用や誤解の防止に大いに役立つと思う。また用例が日常使うような文なのでありがたい。PIVの用例は文学的、キリスト教的のものが多く、理解に苦しむ。

残念ながら誤植がかなり報告されています。出版前に誤植ハンター？　を募集して誤植を見付ければ、もう少し減らせたのではないだろうか。

目次

エス日辞典を使って----------1
明治後期–戦後のエスペラント書籍----------2
中部国際空港、愛称：セントレア (Centrair) でのボランティア活動について----------3
Vorto "Hitosasiyubi"----------5
Zamenhofa Ekzemplaro を海外のエスペランチストに----------6
故鈴木巌雄さんの蔵書----------7
世界大会・・・フィレンツェから横浜へ----------8
予告　エストニアのゆうべ　Zamenhof-Festo06----------10
編集後記----------10

明治後期–戦後のエスペラント書籍、岡山の民家で発見

山陽新聞より転載

明治後期から戦後に出版された国際共通語エスペラントの書籍類＝山陽女子高

国際共通語エスペラントに関する明治後期の書籍類が岡山市内で大量に見つかった。小説家二葉亭四迷が手掛けたテキストや教科書、会報集など国内草創期の普及ぶりを示す貴重な資料で、戦前戦後にかけ出版された文庫類など含めると計約100冊。同市で10月開催の日本エスペラント大会を控え、関係者の注目を集めている。

保存されていたのは同市中井町、元英語教師吉永瑠美さん（69）宅。岡山商工会議所専務理事を務めた父の故・義光さん（1901—86年）が、旧制岡山一中在籍当時から購入していたらしい。

二葉亭四迷のテキスト「世界語読本」（1906年）は、エスペラントの考案者ザメンホフの基本例文に「floro＝花」などの訳が付けられており、当時の知識人の傾倒ぶりがうかがえる。国内で同年発刊の教科書は世相を反映。序文には「日露戦争で列強入りし、国民に国際語を知ってもらう」と記されている。

会報集は、日本エスペラント協会誕生（同年）直後の第２号からの３年分約300ページ。「東京外国語学校（現東京外国語大）で授業が始まり、約200人が受講」との記述や「私が教えただけで約600人」との語学教師の報告があり、浸透の一端がかいま見える。

戦前の独仏で出版された小説や戯曲、国内で戦後発刊された文法書もあり、各書物には義光さんが書き込んだ日本語訳が残っていた。

第92回世界エスペラント大会

期日：　2007年８月４日(土) ～ 11日(土)
主会場（各種会議場）：　パシフィコ横浜
副会場（式典・演芸大ホール）：　横浜みなとみらいホール
副会場（音楽・演劇ホール）：　神奈川県立音楽堂

中部国際空港、愛称：セントレア (Centrair) での

ボランティア活動について

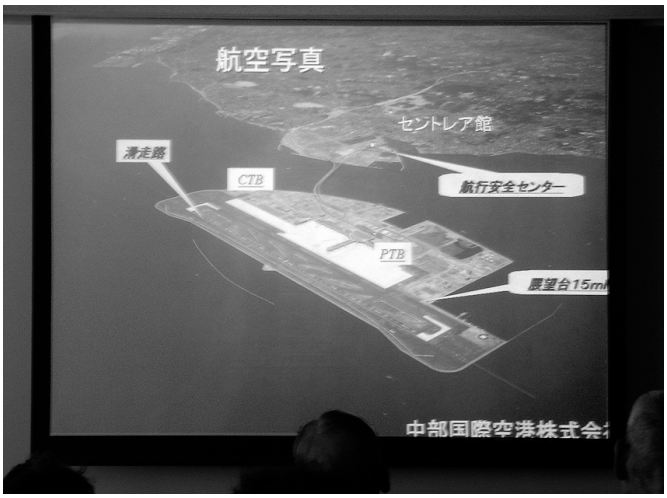
磯部　晃　（愛知県 大府市 在住）

Centrojapana Internacia Flughaveno, ties karesnomo estas "Centrair". Tio estas artefarita vorto el "centre" kaj "air" de anglaj vortoj.

2005年（平成17年）２月17日(金)に国内３番目の本格的な国際空港として愛知県常滑市沖にオープンした、名古屋からは名鉄の快速特急ミュースカイで28分にある、ここが私のボランティア活動の場所です。「月２回以上活動できる人」という条件で空港近辺の各市町にある国際交流協会を経由してボランティア登録の募集がありました。この協会で翻訳グループに登録している私は、早速登録に応募しました。セントレア開港前に面接試験と研修を受けて活動に入りました。現在セントレアにおける案内ボランティアの活動人員は約140人です。毎日４シフト制、３～５人毎が１シフト３時間を分担して出発・到着ロビーなどの目立つ所に立って案内をしています。エンジ色のチョッキを着て対応言語の腕章を着けて、それぞれがＣＳ世界No.１をめざして活動しています。

ここで私はエスペラント語の宣伝のために「ESPERANTO」の腕章を着けて活動をしています。

＊　ボランティアによる対応言語とレベルは、それぞれの自己申告で整理されています。現在の顔触れを視ると、英語、中国語、韓国語、ポルトガル語、スペイン語、フランス語、インドネシア語、ドイツ語、エスペラント語、手話のできる人が登録をしています。もちろん、これらの言語を母国語としている人もおられれば、６か国語に対応できますといわれる猛者も登録をされています。シフト制度のために、お互いが全員と面識を持つことは簡単ではありません。また、毎シフトにすべての言語の人が活動をしている訳でもありません。私が活動をしているときには、エスペラント語には対応できます。



開港見学会で　撮影：山田義

ボランティアのメンバーには、外国語に興味を持っている人が多いです。でも外国語の習得の苦労を基本的には、実感している人の集団でもあります。エス語もそういった言語の１つと受け取られ、習得のしやすい言語であると雑談・説明をしていても、各ボランティアから、にわかには受け入れてもらえませ

ん。エスペランチストの皆さんがセントレアに遊びに来て、実際に空港で会話をしている場面をぜひ、彼らに見せること、実現させてください。

＊　ボランティア活動の内容は、開港から１年半を経過して、ますます充実し発展しています。案内ボランティアと社会見学ボランティア（コーディネータならびにアテンダント）があります。セントレア訪問者（一般）が空港の見学をするためのターミナルツアーは、空港会社のしかるべき部署が有料で提供しております。これと同じあるいはそれ以上の内容を、ボランティア活動で、近郊の小学校（高学年）・養護学校・特殊学級の学童を対象に社会見学 ＜空港で働くひとびと＞ として12コースを提供しています。「基本コース、環境・ＵＤコース、飛行機なるほどコース、空港貨物コース、管制塔コース、税関コース」などを、愛知・岐阜・三重の近郊県ばかりでなく、遠くは長野・静岡・滋賀・兵庫・グアムからの学童の学習に寄与すべく、ボランティアのメンバーで対応しております。 … これが社会見学ボランティアです。

しかし、何といっても国際空港でのボランティア活動としての魅力は、外国語・外国人との直接なコミュニケーションの場で、人さまのために役立てること！（活動領域は、非制限地区 (malrestriktejo)の範囲内です。） また、インフォ・カウンタのお嬢さん方への支援もしますが、彼女らとの根本的な違いは、カウンタ内に閉じ込められることなく、空港内を必要に応じて、お客様を目的の場所まで、会話を楽しみながら、自由に移動できること！ … これが案内ボランティアです。

＊　「案内ボランティア」の訳語を考えてみましょう！　私は、その活動の内容をかんがみると、次の訳語を使用したい。Volontulo indikiva, kiu direktas vojon irotan norden, dekstren, rekten, antaŭen ... これが職業となれば、 ĉiĉerono という単語がある。案内 ＝ ガイド（さん） ＝ gvidanto から受ける印象は、「旗を持って団体さんの先頭を歩く人」や 「暗い足下を照らしてあげる人」を連想して好きになれない…、ここでいう「案内ボランティア」の活動は、もう少し積極性と柔軟性のあるものとなっているためでしょう。

その「活動のようす」を少しのぞいてみましょう！　空港 (flughaveno) には、案内所 (informejo) があります。そして、インフォメーション・カウンタ (informeja kontoro) に働くお姉さんたちと連携し活動内容 (aktivaj servoj) を取り出すわけです。彼女たちは 飛行機 (aviadilo) の接続 (koresponda flugo) や遅れ・変更・キャンセル (malfruiĝo / ŝanĝo / nuligo) の問い合わせ(demandoj)にコンピュータを使用して応えるのにけっこうお忙しいのです。

あるいは、何か不安そうにしている 外国人（alilandanoj）や内国人に、積極的に声をかけたり、かけられたりして、お困り事項の解決に援助の手を差し伸べます。一般的な質問 (ĝeneralaj demandoj) ならば、「案内ボランティア」におまかせください！です。”トイレはどこですか？”, ”水飲み場はどこにありますか？”, ”長野県の松本までバスで行きたいのですが、乗り場はどこですか？", ”名鉄の電車は、どこで乗れますか？”, ”出迎えに来ているはずの人に会えないのです。どこかほかで待っている可能性はありすか？”, などなど　質

問は多種多彩です。　自分で処理できない言語の場合には、ほかのvolontulojとトランシーバ（radiokomunikilo）で連絡をとれます。

スワ！Iu vokas min aŭdate japane: “Jen volontulo ○○, al volontulo □□. Mi parolas de l' dua-etaĝa vestiblo internacia. Venu ĉi-tien tuj, mi atendas vian helpon kun kliento.” 急いで駆けつけてみた私でしたが、Mi ŝvitis sufiĉe je komunikado en la portugala ...。

Ekis mi funkciiĝi kaj taskas indikative kiel ano de volontulaj grupanoj de la komenco ĉe “CENTRAIR”, kio estas karesnomo de la Centrojapana Internacia Flughaveno. Tiu flughaveno situas sur maro en Aiĉi Pref., ek de 2005-2-17. La volontularo ne nur taskas helpon al vizitantoj alilandanaj / enlandanaj por montri propran direkton, sed ankaŭ donas servon pri sociala studado de elementaj lernejanoj.

Leciono de japanlingvaj esprimoj

Vorto "Hitosasiyubi"

Hitosasiyubi estas japana esprimo por montrofingro, kaj la vorto konsistas el tri etimoj, kiuj sumiĝas sence je "fingro por montri homojn",

Nuna etiketo en Japanio tamen permesas al ni montri montrofingre kion ajn, ĝuste escepte de homoj!

Malgraŭ tio, laŭ mia malgranda scio, neniu ĝis nun proponis anstataŭan neologismon Hitosasunayubi (laŭlitere fingro ne por montri homojn) aŭ similajn. Oni jam alkutimiĝis al la paradoksa sed longe enradikiĝinta esprimo Hitosasiyubi kaj jam apenaŭ sentas stranga tiun malaktualan nomadon.

Eble povas esti ke en antikva Japanio montri montrofingre homojn estis ĝenerala kutimo kaj neniel ofenda. Tamen, probable post vasta ekuzo de pafilo, oni pli kaj pli evitis tiel montri homojn, ĉar tiu gesto elvokus malican imitadon murdi pafile.

Duoble tamen, estas sola escepto al tiu ĉiutaga regulo etiketa. En la mondo de gesta lingvo japana oni uzas ĝuste tiun geston por montri homojn! Tiu fakto konstatigas al mi ke per-montrofingra montrado estas origine tre natura kaj logika maniero laŭ la vidpunkto de komunika ekonomio.

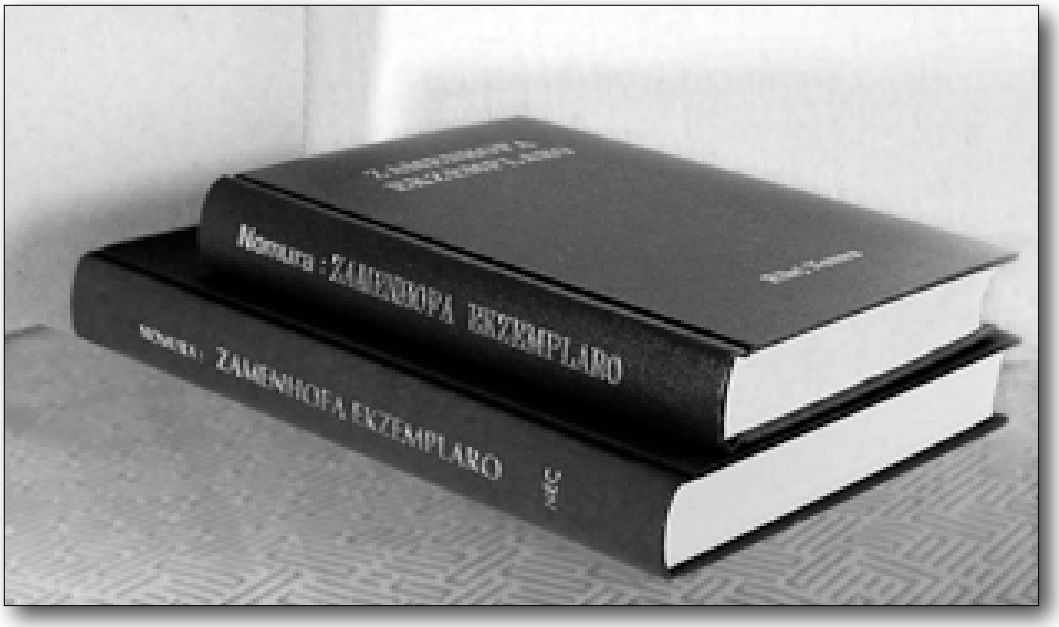
De tio mi povas konkludi ke la ordinara japana komunikado estas pli katenita de etiketo absurda kaj nenatura dum la gestkomunika versio estas libera de tia absurdaĵo. En tio kuŝas iom da ironio: supozeble la komunika instrumento por handikapitoj estas malpli katenita de malavantaĝo ol la normala negestlingva instrumento. ☆

Zamenhofa Ekzemplaro を海外のエスペランチストに

名古屋エスペラントセンター出版会は、1989年にZamenhofa　Ekzemplaroを刊行しました。野村理兵衛氏が生涯をかけて収集し編集した、ザメンホフ用例辞典であり、すべてのザメンホフの著作から用例が採られている貴重な作品です。

出版会としては、採算を度外視してでも、一人でも多くの人に使っていただきたい、との願いを込め低価格で販売してしています（国内価格8900円、UEAは現在85.80ユーロで販売しているがこれはユーロがまだ安かった時代に取引された為）。それでも、ヨーロッパの一部を除けば、海外のエスペランチストにとっては気軽に購入できる額ではありません。

私たちはこのたび、出資者のみなさんに対して、「出資金一口5000円をもって1冊の



▲NEC発行のZamenhofa Ekzempraro（下）先行版（上）　　撮影：山田義

Zamenhofa　Ekzemplaro　を買い取っていただき、それを私たちが出資者の指定する相手に代行発送しましょう」、という提案を行いました。その結果、15冊のZamenhofa Ekzemplaroが海外のエスペランチストに贈呈されることになりました（うち９冊は、発送先の指定がなかったので、私たちの責任で、TogolandoのGBEGLO Koffi さんにまとめて送り、彼から希望者に渡るように手配しました）。

これとは別に、名古屋エスペラントセンター出版会への寄付として103万円が寄せられています。この場を借りて、厚くお礼申し上げます。これを原資として、さらに多くのエスペランチストに贈呈ができるようにしたいと思います。

山口真一

故鈴木巌雄さんの蔵書

山本　修

今年の6月、京都の女性から電話がありました。彼女はエスペランチストではありませんが、電話帳で京都エス会を見付け、三重エス会の電話番号を教えてもらったそうです。話の内容はこうでした。彼女の祖父は桑名（三重県）で今年103歳で亡くなりました。遺品の中に、エスペラント関係の本が数十冊ありましたので良ければ差し上げます。本は四日市(三重県)に住んでいる母親の手元にあります。早速私はお母さんを訪ね、本をいただいてきました。

鈴木巌雄さんは戦前名古屋を中心にエス運動に参加されたそうです。（そのころは安達巌雄）。戦後はエス界から離れられたので、三重エス会の人はだれも知りませんでした。彼は当時の国鉄の名古屋鉄道管理局に勤めておられたとのことです。

蔵書は1920-30年代のものです。いくつかご紹介します。

- 千布利雄著「大成和エス辞典」日本エスペラント協会　1927
- 日本大会の集合写真　開催場所・年号不明
- LA FERVOJISTO 1925-9
- 石黒修著「エスペラント初歩」名古屋中央放送局　1927
- 白木欽松著「非常時・前奏曲」名古屋エスペラント会　1938
- Kabe “En fumejo de l’ opio” 1909
- Zamenhof “Lingvaj Respondoj” 1927

三重エス会でこれらの蔵書について検討した結果、名古屋エスペラントセンターに寄贈しよう、ということになりました。よろしくお願いいたします。

8月26日(土)の午後、公開講演会が愛知民主会館のホールであった。熊木秀夫さんと堀泰雄さんが講演した。講演の後記念写真に残ったのは私を含めて15人ほどでエスペランティストはその半数ほど。講演を聞いた人たちは全部で20数名だった。そのあと東区の「はなごよみ」で講師を囲んで懇親会があった。▲撮影：山田義　▶ポスター

世界大会・・・

フィレンツェから横浜へ

黒柳吉隆

イタリアのフェレンツェで行われた世界エスペラント大会に参加するとともに、その前旅行としてシチリア島の名所旧跡めぐりに妻と共に参加した。中部国際空港から飛行機を乗り継いで島最大の都市パレルモの空港に着いたのは、飛行機の遅れもあって夜中に近かったが、リムジンバスも未だ運行していて、「要注意」といわれたタクシーを使うこともなく無事予約してあったホテルに入った。

翌朝、街の中心から５kmほど離れたところにあるリゾートホテルにタクシーで向かった。当初の案内では、「正午にパレルモ空港集合」となっていたが、出発の２日前になってやっとこのホテルの名前と場所を聞き出し、そこで待つことの諒解を得た。タクシーがそこに着いたときにはすでに数人が集まってきていた。ヨーロッパ各地のほか、オーストラリア、ブラジル、イスラエル、日本などからの22名が、そこを拠点に、観光バスで島内のあちらこちらへ出かけた４泊５日の旅は、暑かったが面白かった。

地中海に浮かぶこの島には、遠くローマ、ギリシャの時代の遺跡があり、キリスト教にイスラムの文化が渾然と交わった世界遺産の数々は、ガイドが流暢なエスペラント語で説明してくれるので、その特徴がよく理解できた。面白かったのは、みんなの質問だ。それぞれ自分の文化を背景に質問するので、お互いに予想外の話題が出て、文化遺産の受け取り方にもお国柄が表れる。そして言葉の壁がないので、その続きがバスの中や食事の時にも交わされて、とても和やかでにぎやかだ。

だれにも中立な共通の言葉のおかげで、すっかり親しくなり、よい道連れができて旅の味わいが一層深まった。これはよかったのだが、ちょっともったいないことには、みんな同じ大会会場に向かうのにパレルモで一旦解散してそれぞれのルートでフィレンツェへ向かうことになっていた。聞くところによると、船旅とか船プラスバスの旅などLKKが提案したが、「遠足費が高くなる」という理由で、現地集合、現地解散ということにUEAが決めたのだそうだ。私たちはピサまで飛行機で、そこから列車でフィレンツェに行った。

翌日（大会初日、土曜日）の午前中は旧市街を見て歩き、午後から受付を済ませた後、ただ一つ予定に入れていた半日遠足でウフィッツィ美術館を見学した。絵画も彫刻も私のような素人にもそのすごさに圧倒される。

会場では、最近の大会やオーストラリアの夏期講習、ヒマラヤ・レンコンティーヂョなどでなじみになった人たちと交歓のエールを交わしたり、10数年、あるいは20年ぶりに再会できた我が家の「客人」とも話が弾んでとても楽しかった。

横浜UKのために会場内に設けられたスタンドに半日詰めたときの訪問者や会場のあちらこちらやホテルで横浜へのお誘いをしながら話した人たちの、横浜UKへの感触は、「もちろん楽しみだ」という声とともに、「遠い」、「暑い」、「旅費、食費が高い」などの理由を挙げて「敬遠したい」という声もかなり聞かれた。

そんな中で、20年ぶりに会えたドイツの旧友は、「数十人の旅行団を募集して参加する計画だ」と言ってくれた。また、フィンランドの人からは、「今年の５月に開通したヘルシンキ、中部国際空港間の直行便を利用して、名古屋入りしてその周辺から横浜までを数日かけて旅する、30名くらいの旅行団を募集する。名古屋周辺のエスペランチストが空港に出迎えてくれたり、一緒に案内してくれるとうれしい」という話も持ちかけられた。「私たちもうれしいが、横浜でのお手伝いもあるので、全部同行して旅行ガイドや通訳を務めることは難しいと思う」と伝えたが、今後の具体化の中で、相談しようということになった。中部空港指定の旅行計画には、東海地方の人たちの協力が必ず必要になるであろう。最近のパスポルタセルボの問い合わせにも、「横浜UKの前後に訪ねたい」という希望も舞い込んできている。

いよいよ「次の大会は横浜」となったので、いろいろな形での協力、活動の場が必要になり、エスペランチストの間にも気持ちを盛り上げていくときになったのである。また、それによって国内にエスペラントが目に触れ、認識される機会にしなければもったいない。みんなが小異を捨ててこの大きな事業のために協力していきたい。もちろん、私も大きな楽しみを与えてくれたエスペラントのために、この機会に出来る限りの協力をするつもりである。　☆

http://eo.wikipedia.org/wiki/Florenco

NEC名古屋エスペラントセンターでは、
10月4日(水)18時から
エストニアのLydia Lindlaさんを迎え
「エストニアの夕べ Estona Vespero」
を開きます。会では軽い夕食を用意します。

Lydiaさんはフランス、中国、リトアニアでの世界エスペラント大会に参加したり、毎年夏に開催のBaltaj Esperanto-Tagoj の組織委員もしています。孫が３人。エストニア民族衣装に関わっています。セントレアから入国し、豊明の山田宅に20日ほど逗留します。その間、岡山での日本エスペラント大会に参加、来年のヨコハマ世界エスペラント大会の会場へも観光に行きます。日本大会のあとSONKISOJの例会に、八ヶ岳エスペラント館で10月19日–20日のチャンブロチャルマの例会にも出席します。

「ザメンホフ祭06」の日時とメインゲストが決定。

日時　　12月10日(日)午後
メインゲスト　Mario Jose Menezes ブラジル領事館・副領事
会場やプログラムなど詳細は、決定次第センターホームページや郵送の案内状で通知いたします。　（企画・猪飼吉計）

✐編集後記✂　次回250号は年内に発行予定です。日本のエスペラント運動100周年の今年最後の号です。原稿はyamadapiano@mac.comへお寄せください。　山田義